

～ 静岡市立静岡病院 創設150周年記念事業～  
第10回 静岡市民「からだ」の学校

# 医の150年 わたしたちの静岡、 わたしたちの医療

特別講演

徳川家がつくった  
明治初年の静岡病院

国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授

樋口雄彦 先生

2018  
10月20日(土)

14時～16時(開場 13:30)  
グランシップ 11階会議ホール「風」

主催



地方独立行政法人  
静岡市立静岡病院

後援

一般社団法人静岡市静岡医師会・静岡新聞社・静岡放送、常葉大学  
静岡県公立大学法人静岡県立大学、静岡県立大学短期大学部(順不同)





# プログラム

■ 14:00 医の150年 わたしたちの静岡、わたしたちの医療

地方独立行政法人静岡市立静岡病院

理事長・病院長 宮下 正

・・P2

■ 14:20 休憩

■ 14:35

## 特別講演

「徳川家がつくった  
明治初年の静岡病院」

・・P6

講師

国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授

ひぐち たけひこ

樋口 雄彦 先生

■ 15:55 アンケート記入・閉講

# 静岡病院創設 150 周年記念事業 第 10 回静岡市民「からだ」の学校 医の 150 年 わたしたちの静岡、わたしたちの医療

地方独立行政法人静岡市立静岡病院 理事長・病院長  
医療がつなぐ「ひと」と「地域」の交流センター長  
宮下 正



みなさん、ようこそ静岡市民「からだ」の学校へ。

平成 26 年 7 月に第 1 回静岡市民「からだ」の学校を開催してから、今回でちょうど第 10 回目となりました。市の中心部で年 2 回開催する一方、中山間地の梅ヶ島、井川、清沢地区でも「からだ」の学校地域版として、同様の講座を地元のみなさんとともに、夏季に開催することが定例となりました。5 年目ともなりますと、開催を心待ちにしてくださる方も、少なからずいらっしゃいます。毎回ご参加くださるみなさまあってこそこの「からだ」の学校、心から御礼申し上げます。

～特別講演に樋口雄彦（ひぐちたけひこ）先生をお迎えするまでのいきさつ～

かねてから、「静岡学問所」（平成 22 年、静岡新聞社、静岡市）等の著書を興味深く拝見しておりました樋口雄彦先生の「見る読む 静岡藩ヒストリー」（静岡新聞社）が昨年刊行されました。書店で目にしましたその本は、写真や図版を多用したグラフィックな作りで、幕末・明治維新前後の静岡に関心を寄せる者にとっては、まさに垂涎の著書でした。さらに中を見ますと、一つの章が「静岡藩の病院と医療」となっていて、静岡病院に関する記載や貴重な写真が何葉も収められているではありませんか。いつの日か、ぜひ樋口先生のお話を伺う機会を得たいものだと考えておりました。

そして、いよいよ、静岡市立静岡病院は、来年、2019 年（平成 31 年）2 月 21 日に創設 150 周年の大きな節目を迎えることとなりました。第 10 回「からだ」の学校は、150 周年記念事業として、樋口雄彦先生に特別講演をお願いしたいと思い立って、研究室に電話を差し上げたところ、「いいですよ。つい先日も静岡に講演に行ったばかりです。」とのありがたいお返事。樋口先生は、現在、千葉県佐倉市にあります国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授として、幕末・明治維新史を中心として幅広くご研究なさる中で、とくに静岡に関する著書・論文・ご講演を数多くなされております。いわばこの激動の時代の“静岡学”の大家であります。

差し出がましいかもしれません、樋口先生、静岡新聞社様、史料の所蔵者様のご許可をいただきまして、先にふれたご著書「見る読む 静岡藩ヒストリー」の静岡病院に関する部分を複写・あるいは引用して配布資料に収めております。快くご許可をいただきました関係各位には、この場を借りて厚く御礼を申し上げます。

わたしは、旧清水市で医業に従事されるかたわら、静岡県・静岡市の医療の歴史に関する研究に傾注された篤学の医師、土屋重朗先生の著書、たとえば「静岡県の医史と医家伝」(昭和48年、戸田書店、旧清水市)、「静岡県医療衛生史」(昭和53年、吉見書店、静岡市)から多くのことを学びましたが、静岡病院の診療面では一切記録が残っていない、とのことで、まことに残念な思いをしておりました。

このたびの講演にあたって、事前に樋口先生がお送りくださった資料（本冊子に収録しています）を拝見しますと、たとえば、史料7（本冊子9頁）では、静岡病院の生徒が、当時刑場であった安倍河原で、解剖学の勉強に資るために、人骨や生首を拾い集めて、“欣々然”“踊躍して喜”んだという記載に、深く心を動かされました。なんと獣奇的な話か、と思いかも知れませんが、本物の人体解剖がまだまだ当たり前でなかった時代のことです。医学を志す者にとって、解剖学は、基礎医学の、そのまた基礎であります。西洋でも、往時“死体泥棒”が横行した話は有名であります。かれらの喜びようは、時代は少しさかのぼりますが、腑分けを見て、その後解体新書を翻訳した杉田玄白、前野良沢の感動にもつながるものでしょう。

また「静岡藩士志村貞廉日記による静岡での医療」は開院後まもない静岡病院の診療の一端をうかがい知ることのできるまことに貴重な資料であります。歴史学では、その当時の生の史料、同時代史料のことを、一次史料というそうですが、これを発掘する歴史学者のお仕事に、本日触れることができることをたいそう喜んでおります。このようにして、地道な研究の積み重ねによって、本物の史実は明らかになっていくということです。

### ～なぜ、過去を振り返るのか、それは現在・未来を考えるため～

今回の企画は、確かに150周年の記念事業であります、それだけで懐古趣味のように、このテーマを取り上げたわけではありません。

まず、わたしたちが、地域の医療の生き立ちを知る、ということ。過去を知るだけでは、歴史好きを満足させるに過ぎないかもしれません。過去は、現在そして未来を考えるために学んでこそ意義があります。

今日的な課題として、今後、日本の人口は、ジェットコースターで急降下するように減少していくことが確実だとされています。今、ふたたび激動の時代であります。縮んでゆく人間社会のまっただなかで、医療はどうあればよいのか、病院はどうあればよいのか。現在、国の医療政策は、“地域医療構想”的もとで、今後、病院の統廃合や経営形態の変化、在宅医療の推進が進められようとしていますが、どのように最適解を導くことができるのか。

1878年（明治11年）6月28日に、静岡県令が発令した「病院区および研修医区概則令」によれば、静岡県下を五つの区にわけ、これを病院区とよび、各病院区をそれぞれいくつかの医区に分け、病院区には公立病院を一つ設けることとし、各医区に一つの医師の研修所を設け研修会を開く、とされたとのことです（土屋重朗、静岡県の医史と医家伝、昭和48年、戸田書店、旧清水市）。その内実は、どれほどの実効性があったのか、わかりかねますが、地域の医療計画として、今日的に学ぶことがあるかも知れません。そして、病院が窮地に陥るのは、ほとんど財政的な困難と医師不足によることも、明治時代以来変わりがありません。

多くの病院が消え去る中で、静岡病院が長く命を保ちつづけていることは、奇跡的ですらあります。それを可能にしたのは何か。また、今後もそうであるためには、何をすればよいのか、わたしたちは問い合わせたいと思います。

2年前、2016年（平成28年）4月1日に、静岡市立静岡病院が地方独立行政法人に移行したとき、経済学者宇沢弘文先生が提唱した“社会的共通資本”的概念こそ、わたしたちのめざす医療、病院のあり方を指し示すものとして、公表しました（地方独立行政法人静岡市立静岡病院中期計画）。“社会的共通資本”とは、森林・大気・水道・教育・報道・公園・病院など産業や生活にとって必要不可欠な社会的資本であって、「一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持することを可能にするような社会的装置を意味する。」と定義されます。また、“社会的共通資本”は、大きく「自然環境」「社会的インフラストラクチャー」「制度資本」の三つに分けられ、それらに属する全てのものは、国家的に管理されたり、利潤追求の対象として市場に委ねられたりしてはならず、職業的専門家によってその知見や規範に従い管理・維持されなければならないとされています（社会的共通資本とは - コトバンク <https://kotobank.jp/word/%E5%8D%96%E5%8D%95%E5%8C%97%E5%8A%A1> から引用）。

そうであればこそ、職業的専門家としての責任の重大さも、十分自覚したうえで、わたしたちは、未来に向けて歩み続けたいと考えています。

2018年（平成30年）10月20日

# 静岡病院の歴史

| 西暦   | 和暦   | できごと  |
|------|------|---|
| 1869 | 明治2  | 追手町四ツ足御門外(現追手町曰赤病院辺り)に藩立駿府病院として開設<br>公衆衛生事業として種痘を実施 |
| 1871 | 明治4  | 廃藩置県  |
| 1876 | 明治9  | 公立静岡病院(県立)として屋形町に開院                                 |
| 1882 | 明治15 | 県立から郡立(有渡・安倍郡)に移管                                   |
| 1889 | 明治22 | 静岡市制施行に伴い、静岡市に移管                                    |
| 1905 | 明治38 | 市立静岡病院と改称   |
| 1945 | 昭和20 | 戦火により焼失   |
| 1946 | 昭和21 | 隣保館(巴町59番地)を仮病院とする                                  |
| 1951 | 昭和26 | 現在地に移転  |
| 1959 | 昭和34 | 総合病院の認可を受ける   |
| 1962 | 昭和37 | 心臓病センター開設   |
| 1970 | 昭和45 | CCU・ICU設置   |
| 1974 | 昭和49 | 冠動脈攣縮(れんしゅく)の研究を世界に発信<br>本館(旧東館)竣工                  |
| 1977 | 昭和52 | 臨床研修病院に指定される  |
| 1985 | 昭和60 | モービル CCU稼働開始  |
| 1987 | 昭和62 | 西館高層棟完成   |
| 1989 | 平成元  | 東館改修工事  |
| 1990 | 平成2  | オープンシステム(開放型病院)実施                                   |
| 1992 | 平成4  | 腹腔鏡手術開始   |
| 1999 | 平成11 | 開設130周年<br>静岡病院フェア開始                                |
| 2003 | 平成15 | 静岡市、清水市合併<br>病院機能評価認定                               |
| 2006 | 平成18 | 地域医療支援病院の承認取得                                       |
| 2007 | 平成19 | 地域がん診療連携拠点病院に指定される                                  |
| 2008 | 平成20 | 新東館竣工<br>ハートセンター、救急外来拡充                             |
|      |      | 重症患者治療室(GHCU)、患者さん支援図書室開設<br>電子カルテシステム稼働            |
|      |      | 病院機能評価認定更新(1回目)                                     |
|      |      | 開設140周年<br>DPC対象病院となる<br>単孔式腹腔鏡手術開始                 |
| 2012 | 平成24 | 卒後臨床研修評価機構(JCEP)認定                                  |
| 2013 | 平成25 | ハイブリッド手術室完成<br>ロボット支援前立腺手術開始                        |
|      |      | 災害拠点病院に指定される<br>病院機能評価認定更新(2回目)                     |
|      |      | 経カテーテル大動脈弁置換術開始<br>静岡市民「からだ」の学校始まる                  |
|      |      | 院外処方化   |
| 2016 | 平成28 | 地方独立行政法人に移行<br>7対1看護体制に移行                           |
|      |      | PET-CT診断装置導入<br>医師の働き方改革着手                          |
| 2017 | 平成29 | 出退勤管理ICカードシステム導入                                    |

# 特別講演

## 「徳川家がつくった 明治初年の静岡病院」

講師

国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授

ひぐち たけひこ

樋口雄彦先生



### 講師略歴

#### 幕末・明治維新を中心とした『静岡学』の第一人者

1961年、熱海市生まれ。静岡大学人文学部卒業。博士（文学、大阪大学）。沼津市明治史料館学芸員を経て、現在、国立歴史民俗博物館・総合研究大学院大学教授。著書に、『旧幕臣の明治維新 沼津兵学校とその群像』（2005年、吉川弘文館）、『沼津兵学校の研究』（2007年、同前）、『静岡学問所』（2010年、静岡新聞社）、『第十六代徳川家達一その後の徳川家と近代日本』（2012年、祥伝社）、『敗者の日本史 17 箱館戦争と榎本武揚』（2012年、吉川弘文館）、『人をあるく 勝海舟と江戸東京』（2014年、同前）、『幕臣たちは明治維新をどう生きたのか』（2016年、洋泉社）、『シリーズ藩物語 沼津藩』（2016年、現代書館）、『見る読む 静岡藩ヒストリー』（2017年、静岡新聞社）、『幕末の農兵』（2017年、現代書館）、編書に『海軍諜報員になった旧幕臣－海軍少将安原金次自伝－』（2011年、芙蓉書房出版）、分担執筆に『久能山誌』（2016年、静岡市）など。

# 明

治維新によって江戸幕府は廃され、將軍だった徳川家には、新政府から 70 万石の領地が駿河・遠江・三河に与えられ、駿河府中藩が成立しました。最後の將軍 15 代慶喜に代わり、藩主には 16 代目を継いだ徳川家達が就き、旗本・御家人だった徳川家の家臣、すなわち旧幕臣たちも東京から駿遠の地に大挙移住しました。藩士たちや領民のために、明治 2 年（1869）2 月に駿府病院が設立されました。同年 6 月に駿府が静岡と改称され、藩名も静岡藩となつたため、病院の名称も静岡病院となりました。頭（院長）に就任した林紀（研海）はオランダに留学した経験を持ち、また坪井信良・戸塚文海・柏原学而ら、スタッフには他にも西洋医学を学んだ優秀な医師たちがそろっていました。静岡病院は、同じく藩立の沼津病院・掛川小病院とともに地域での診療活動を行ったほか、藩士の中の医師志望者の育成や地元医師の再教育を行うなど医学教育にも取り組みました。西洋医学もあまり普及せず、病院という施設も一般的ではなかった明治初年、静岡病院の出現は「医療の文明開化」をこの地域にもたらしたといえます。

設立から 150 年にあたると同時に、明治維新から 150 年でもある今年、本講演ではこの静岡藩の静岡病院について、史料にもとづきながら、その概略と歴史的な意義をわかりやすく解説します。

## ■ 資料一覧

- 徳川家がつくった明治初年の静岡病院 資料（8、9 頁）
- 静岡病院の医師・職員たち（10 頁）
- 静岡藩士志村貞廉日記にみる静岡での医療（11 頁）
- 樋口雄彦『見る読む 静岡藩ヒストリー』  
2017 年、静岡新聞社より（12～14 頁）

史料1 「駿河表召連候家来姓名」(慶應4年7月、国立公文書館所蔵)抜粹

奥医師 大膳亮弘 玄院 多紀養春院 半井ト仙 大渕祐玄 本康宗琢 浅田宗伯 小堀祐真

渡辺雄伯 吉田秀貞 平塚検校 土生玄昌 石川香雲院 坪井信良 石坂宗貞

奥詰医師 高松凌雲 中川隆玄

奥詰医師雇 津軽意三 吉田玄琇

史料2 駿府病院開業の布告（本冊子13頁上段）

今般医学修業病者救助之為メ厚き思召を以病院御取建ニ相成來ル廿一日より御開相成候ニ付而  
者町方在方之者ニ至る迄有志之者者其所奉行江申出奉行所添鑑を以致入門學術研究可致事  
御家臣者勿論町方在方之者男女老少之無差別病苦有之候者願出候ハヽ御医師立合診察相談之上療養差加候事

但御薬代者御場所江上納可致尤貧窮之者者村役町役より願書差出相違も無之候ハヽ御施薬  
可被下候又御場所江罷出兼候病者者見舞可申候事

明治二巳年二月

駿府病院

史料3 駿府病院の規則書（本冊子13頁下段）

## 規則書

一毎日講義生徒教導之事

一初而診察願出候者者御役名宿所姓名相認候手札差出可申事

但市中の方より願出候者者本人手札之外引受人手札相添差出可申事

一薬種料之儀者毎月晦日上納之事

一仮病院之儀者御場所手狭ニ付寄宿病人者預り不申候得共外療施術後等模様ニ依リ臨時  
一二泊為致候事

一願出候病人者掛り之医師一同立合診察相談之上配剤致候事

一差向急症之外者診察調合毎日九ツ時限之事

一他所病人者一等医師二等医師見舞候事

一病院掛り之医師自分病用者一切相断候得共自然私宅江頼來候分者診察并見舞可申候事

明治二巳年二月

駿府病院

史料4 『多々良梅庵小伝』(1930年、私家版)

(前略) 明治維新は彼の二十二歳の時であつた。(中略) 翌二年二月静岡に駿府病院が開かれ  
た。本院は医術施業と医学修業とを兼ね、病院頭取院長は林紀にして坪井信良、戸塚文海、柏原  
学而等の名医悉くこゝに集り、世俗以て駿府大病院と称するに至つた。是に於て彼は旧来の漢方  
医を捨て、断然洋方医たらんと決し、高柳村井出玄通、岡部町大野誠庵両氏の照会を以て駿府病  
院に学ぶこととなつた。此が彼の登龍門となりて将来発展の基礎を為したのである。間もなく沼津  
に至り沼津病院頭取杉田玄端師に従ひ(後略)

## 史料 5 明治 2 年 5 月 10 付坪井信良書簡(『幕末維新風雲通信』、1978 年)

(前略)道之為メ、世之為メ、傍観可仕ニアラサル故、昨冬以来大ニ病院建築之議ヲ建白シ、漸々出来、林研海洞海倅ニテ和蘭在留修業六年學術抜群実ニ方今皇國ノ大医ト云ヘシ、病院頭、(中略)尤も右ニ付一同申合、自家之調合所ハ廢止、日夜院之御用専ラニ取扱、病人診察、病家見舞、寄宿寮書生教導等、殊之外多用相暮申候(後略)

## 史料 6 明治 3 年閏 10 月 27 付坪井信良書簡(同前)

(前略)拙事、近來ハ病院俗務取締ト申役故、凡ソ藩籍中之医員ハ勿論、市在之医生賞貶黜陟より進退都テ関係仕リ、加之静岡ニハ林研海病院頭タリ、次テ信良・戸塚文海頭並タリ。沼津病院ニハ杉田玄端頭取タリ。掛川病院ニハ三浦文卿頭取、各右ニ附属之数輩各等アリ。又駿遠三州、各地ニ配当引移候御家人、壱ヶ所ニ多キハ弐三千家、少キモ千家。(中略)右夫々医生配当。加之、春秋兩度學術検査仕候テ、褒貶進退仕候事故、大略一ヶ年之内、在宅三分ノニ、他行三分ノ一、各所巡回仕候(後略)

## 史料 7 石橋絢彦「沼津兵学校沿革(八)」(『同方会誌』48)掲載の逸話

明治未年の春資業生より医学に転学を命ぜられたる片山直人、三田信、塚原靖、田口卯吉の輩十三人は静岡病院の寄宿舎に入り坪井信良、林研海後改紀、戸塚文海等諸先生に就きて性理、病理、解剖学等の講義を聴き日夜勉強せしが當時安倍川口俗称安倍河原は罪人の刑場にして其附近砂中には死罪者牢死者等の死屍累々たるを聞き医術研究上必要なるを以て屡々骨蒐集に往き或は手或は足各自各様の骨を得て欣々然たり一日田口は皮肉橐爛せる生首を得て踊躍して喜び之を風呂敷に包み帰途安陪川餅の茶店に憩ひ談笑晷を移しいざとて立出で帰路に向ひ行々謹浪して晩に寄宿舎に還り各自獲物を列ぬるに当り田口は之を茶店に遺れたるに気附しが之を取戻しに往んか時已に遅く道亦遠し且身体疲労したれども千金に換へ難き珍宝豈に之を棄るに忍びんや乃ちニ三友人と勇を鼓して再び途に上り夜中前の茶店に至れば衆人集りて喧嘩す老婆曰く先刻貴客の遺物を片附んとして異臭鼻を衝き且汁液の浸出するを認め或は魚肉ならん歟と思ひ啓きて之を検むるに何ぞ図らん生首ならんとは一驚の余り之を村吏に訴へ其処分を乞はんとする所なりと依て田口は之を刑場ら得たる旨並に其用途を百方弁解し漸く之を受取りて還り研究の資に供せりといふ

## 史料 8 明治 4 年 4 月 29 日付松本順書簡(『順天堂の系譜』、2016 年)

(前略)ポンペ以来我一社中にて我道之開化に趣キ候事略天之時来リ候歟と竊ニ雀躍、尚成功を祈念候也。一御憤発可被下候。一、長崎ハ長与専斎、一、大坂ハ緒方ト橋爪琢磨、一、肥後ハ吉雄圭斎、内藤善吉、一、阿州ハ関寛斎、一、津ハ橋本節斎、一、尾ハ長三石、一、彦根ハ貴兄、一、箱館ハ馬島春庭其外、一、越前福井ハ半井其外、一、掛川ハ三浦文明、一、静岡ハ林研海、一、右之外病院ハなく候へ共、医員ハ大凡我同敷子弟而已、殊ニ奥羽越之候伯尽ク子弟之手ニ有之候。誠二大慶罷在候。(後略)

## 静岡病院の医師・職員たち

| 職名        | 氏名             | 幕府時代の経歴                | 後の経歴                |
|-----------|----------------|------------------------|---------------------|
| 頭         | 林紀（研海）         | ポンペ門人、オランダ留学           | 陸軍軍医総監              |
| 頭並・俗務重立取扱 | 坪井信良           | 坪井信道門人、蕃書調所教授、奥医師、法眼   | 東京府病院長              |
| 頭並        | 戸塚文海           | 適塾生徒、ボードイン門人、奥医師       | 海軍軍医総監              |
| 二等医師      | 柏原学而           | 適塾生徒、侍医                | 静岡で開業               |
| 二等医師      | 名倉知文（真斎）       | ポンペ門人                  | 陸軍軍医監               |
| 三等医師      | 名倉知彰（弥五郎）      | 歩兵屯所医師                 | 陸軍二等軍医              |
| 三等医師      | 宮内広（陶亭）        | 林洞海・坪井為春門人、歩兵屯所医師      | 宮内省一級薬剤生            |
| 三等医師並     | 佐藤存（道碩）        | 奥医師道安惣領、ボードイン門人、法眼、御口科 | 陸軍薬剤監               |
| 三等医師並     | 村松良肅（晚村）       | 駿府町医、坪井信道門人            | 公立静岡病院創立監事          |
| 三等医師並     | 戸塚積斎           | 駿府町医、精得館塾生             | 海軍中軍医               |
| 三等医師並     | 遠藤周民           | 小島藩医                   | 陸軍一等軍医、興津で開業、庵原医会長  |
| 員外医師      | 柴田元春           | 寄合医師                   | 東京で開業               |
| 無級看病頭     | 茂木得鍼           | 奥詰医師・御鍼科               |                     |
| 無級看病頭     | 石坂哲（宗哲・宗圭）     | 奥医師・御鍼科                | 神田区役所傭              |
| 無級看病頭     | 杉枝実（仙貞）        | 奥詰医師・御鍼科、法眼            |                     |
| 無級牢屋掛     | 戸川尚敬           | 小島藩医                   |                     |
| 無級牢屋掛     | 高橋玄策           |                        | 江尻で開業               |
| 病院組頭      | 久保田素平          |                        |                     |
| 病院調役      | 橋本昌五郎          | 開成所定役並                 | 陸軍省十五等出仕            |
| 病院調役      | 山本奇平           |                        |                     |
| 病院調役      | 山下巖            |                        |                     |
| 病院調役下役    | 長坂愛吾           |                        |                     |
| 俗務取扱      | 深津仰山（正邦）       |                        | 東京府権中属・七等出仕         |
| 御薬園掛      | 鶴田清次（清次郎）      | 開成所調役・物産学出役当分介         | 博覧会事務局十三等出仕、農商務省御用掛 |
| 御薬園掛      | 鶴田太郎次郎         | 開成所物産学世話心得             |                     |
| 御薬園附属出役   | 稻富市郎           |                        |                     |
| 御薬園出役     | 青木扇十郎          |                        |                     |
| 製煉所長      | 石橋俊勝（八郎・竹原平次郎） | 開成所化学教授出役、大砲製造所調役      | 開拓使大主典              |
| 病院製煉方附属出役 | 佐野友次郎          |                        |                     |
| 使役        | 小川長次郎          |                        |                     |
| 使役        | 長谷川勝次郎         |                        |                     |
| 使役        | 茂木茂（顯三）        | 駿府町奉行支配同心              |                     |
| 使役        | 鈴木幸次郎          |                        |                     |
| 使役        | 伊東源三郎          | 六尺                     |                     |

『静岡御役人附』記載の名簿にその他の情報を追加して作成

## 静岡藩士志村貞廉日記にみる静岡での医療

| 日付         | 記載内容   |
|------------|--|
| 明治2年8月3日   | 馬場丁裏新長屋半井ト仙江行、風邪薬もらい候七貼也   |
| 8月8日       | 半井ト仙塾ニツ木秀徳より薬もらい候七貼  |
| 8月11日      | ニツ木薬もらい候   |
| 8月24日      | 病院へ行、松井信郎ヲ訪当月十日ニ被帰候由也、診察ヲ乞候處信良ハ不診、研海診察薬方付候ニ付薬もらい候  |
| 8月27日      | 坪井信良江行、油薬もらい候  |
| 9月1日       | 病院へ使遣しレイフルターンもらい候四日分   |
| 9月11日      | 病院へ以使薬取ニ遣候、レーフル八日分油薬一分來  |
| 9月12日      | 坪井信良先生へ行診察ヲ乞、前法相用可申旨也  |
| 9月14日      | 医局行肩腫物膏薬もらい候、戸塚文海診   |
| 9月18日      | 半井ト仙内ニ木秀徳江八月中もらい候薬礼金壱分遣候、請取書來  |
| 9月20日      | 医局へ行三貝分膏薬、八日分肝油等もらい候   |
| 9月晦日       | 病院にて膏薬二貝もらい候   |
| 10月18日     | 病院ヘレーフル取ニ出候  |
| 11月8日      | 病院にて膏薬二貝もらい候   |
| 11月9日      | 三雲屋内地之神小祠江痔疾之誓願かけ置候處、痛ミ快ニ付宮鳥居新規拵上候積り、大工利兵衛へ申付候、代金壱両式分式朱也   |
| 11月15日     | 篁斎江薬礼式分式朱ハルサン膏代ニ朱合三分遣候   |
| 12月9日      | 寒邪中リ下痢ニ付、半井ト仙弟子ニ木秀徳ニ薬もらい候、七ふく  |
| 12月11日     | 平臥薬用薬もらい候三ふく、秀徳入來  |
| 12月14日     | 病院ニ木江行診察ヲ受薬もらい候  |
| 明治3年10月10日 | 昨年病院にて薬もらい候代金壱両式分余払方中村へ相托シ置候   |
| 明治4年3月2日   | ニツ木秀徳ヲ呼お倅熱氣ノ診察ヲ受ル  |
| 3月3日       | およし弥痘瘡相発ス○ニツ木秀徳來   |
| 3月4日       | 痘瘡神御棚八幡小路修驗林蔵院江頼ム、御初穂三百文遣し赤紙七枚もたせ遣候  |
| 3月5日       | ニ木來　※8日、12日、13日、15日、17日、4月16日、5月26日にも  |
| 4月16日      | 拙荆出産女子出生、母子共丈婦也、（中略）産婆御台所町おたつ來   |
| 5月22日      | 産婆おたつへ金式百疋祝義遣候   |
| 5月7日       | ニ木秀徳江三月二日痘瘡之時之薬より産後薬五月今日迄之分八十壱貼之礼金六百疋大口料兼遣候、薬代者壱貼ニ付銀一匁之由也  |
| 5月19日      | ニ木秀徳召呼、およし咳之薬拙夫并力之薬もらい候  |
| 6月6日       | 朝お倅虫気にてひきつけ候ニ付ニ木ヲ呼ニ遣候處、間ニ合不申候間、近所ゆヘ林良仙ヲ呼、此人西洋医病院ニ出ル人、診察調薬ヲ乞、午天ニ木来、依而良仙ヲ招キ蘇生之話ヲ申談シ、少シ林ノ療治ヲ請候段申談遣候 |

『元八王子千人頭志村貞廉日記 一』(2012年、八王子市郷土資料館)より作成



## 八章 静岡藩の病院と医療 静岡病院

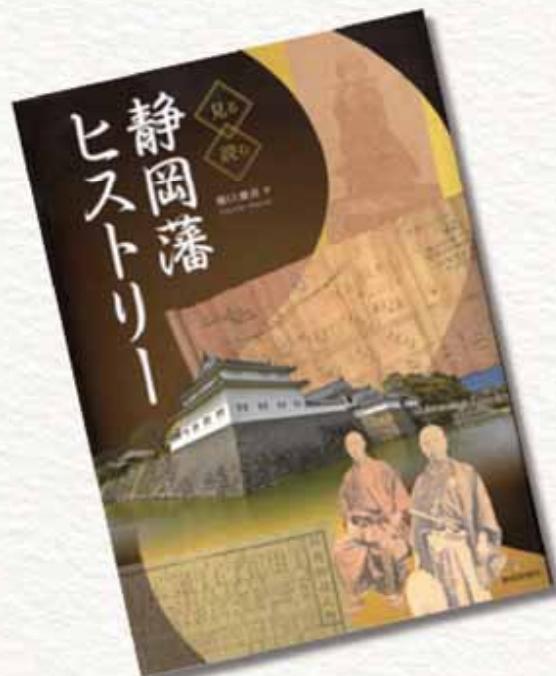
明治元年11月から医師の任命が始まり、翌年2月に駿府城四ツ足門外に駿府病院が開設された。もちろん藩名の変更とともに静岡病院と改称する。

そもそも幕府に仕えた蘭方医たちは、自らの技量を最大限に発揮できる場所であり、一般民衆に対しても多大の恩恵を与える病院という施設の設立を熱望していた。慶應3年（1867）には京都に大規模な病院を設置する計画が進められており、その仕事を任せられた坪井信良は、建築や器具、診療内容もすべて先進地長崎の病院（オランダ人医師ポンペによる精得館）に倣うとともに、それ以上の立派な病院の完成を夢見ていた。坪井は幕府の奥医師・法眼に取り立てられていたが、そのような地位に就くよりも、病院設立こそ医師としてやりがいのある仕事であると感じていた。しかし、その計画は幕府の倒壊により挫折した。ところが、1年後、移住した駿河の地で再び病院設立の情熱が燃え上がり、形を変え実現したのである。坪井は京都でもいっしょだった戸塚文海とともに静岡病院頭並に任命され、頭（院長）の林紀<sup>つな</sup>を補佐した。林は幕府留学生としてオランダで医学を学んできた人だった。

静岡病院では、藩士・領民への種痘の実施など医療活動はもちろん、藩士の医師志望者への医学教育も行い、また駿河・遠江の在村・在町の医師たちの研修・指導にもあたった。病院は既存の建物を転用した仮設であり、本格的な建物は静岡市の清水山に新築することがもくろまれた。ただし、財政難により新築されないままに終わった。

静岡病院は廃藩後、明治5年（1872）には廃止され、計画していたドイツ人医師招聘も実現しなかった。県立の静岡病院が開院するのは明治9年（1876）まで待たねばならなかつた。

出典：樋口雄彦『見る読む 静岡藩ヒストリー』  
2017年、静岡新聞社、134頁。



今般臨院は終業病者救救事務ノ原より  
思合せぬ之處院事不達ニお奉り候ル一事一日  
出家本邦事と存する所方立方へ着きぬ通  
宵忘る者も甚所を行ひよやお身引不  
信體を以て入門學術研究ヲ能事  
由家長之初瀬町方立方主と男女庶少  
妻男別病若有所らるる事無く之を勧め  
立合診察おなじにニ腰主なる加爾事  
但市中之方の就業者等々本人主外  
引支人主札を添差出可ト事  
主札差出可ト事

明治二年二月

駿府病院

## 駿府病院の開院布告

[富士市立博物館所蔵]

明治2年（1869）2月、木版。

## 駿府病院の規則書

[富士市立博物館所蔵]

明治2年（1869）2月、木版。

### 規則書

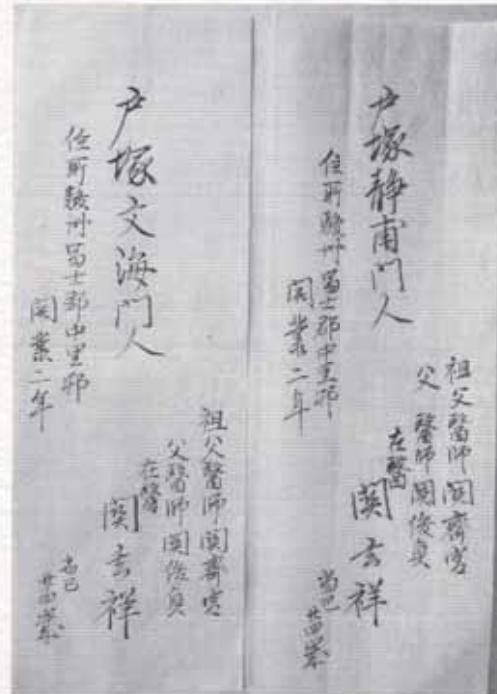
- 一 毎日講議生徒數準三事
- 一 初诊诊疗費者は従石高并姓名記録  
主札差出可ト事
- 一 但市中之方の就業者等々本人主外  
引支人主札を添差出可ト事
- 一 葉種利便を毎月晦日上納之事
- 一 一般病院に於て病院より被寄宿病全  
額一千五百元外療施術後半額相帶  
倍付一二泊為役之事
- 一 額出病全掛り之醫師一同立合診察  
相次ヒ上配割挂之事
- 一 一月間急症外診察料金毎月九時限一革  
一革半病金ギ一革醫師二革醫師是床事  
一病院掛り醫師自ら病院と一切相引負担  
自然結果主計本主計監査主計監査可ト事

明治元年二月

駿府病院

出典：樋口雄彦『見る読む 静岡藩ヒストリー』2017年、静岡新聞社、135頁。

[写真については、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）より許諾を得て掲載しています]



## 在村医の静岡病院入門短冊

富士市立博物館所蔵

明治2年（1869）、富士郡中里村（富士市）の医師が静岡病院頭並戸塚文海に提出したものと思われる。

出典：樋口雄彦『見る読む 静岡藩ヒストリー』2017年、静岡新聞社、136頁。[写真については、富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）より許諾を得て掲載しています]



## 静岡病院の医師たち

横浜開港資料館所蔵

やはり台紙裏面には白井蓮節が撮影したことを示すアルファベットのスタンプが押されている。人数は少ないが顔ぶれの多くが一致しており、上の写真と同じ時に撮影されたことがわかる。中央の子どもは坪井信良の息子坪井正五郎（1863年生まれ）。

出典：樋口雄彦『見る読む 静岡藩ヒストリー』2017年、静岡新聞社、137頁。[写真については、横浜開港資料館より許諾を得て掲載しています]





## ～ 静岡市立静岡病院 創設150周年記念事業～

### ■ 第15回 静岡病院フェア

2019年3月9日（土）開催予定  
静岡市立静岡病院

### ■ 第11回 静岡市民「からだ」の学校

2019年6月30日（日）開催予定  
グランシップ11階会議ホール「風」

SHIZUOKA HOSPITAL  
150th  
Anniversary  
伝統を未来につなぐ

男女老少ノ差別ナク  
病苦コレ有リ候者  
願ヒ出侯ハバ  
御医師立会診察  
相談ノ上療養差シ加ヘ侯

明治二年二月病院開設布告書より



初代 病院頭 林 研海（幕末オランダ留学時代）

ひとこそすべて  
わたしたちは医療のちからで静岡の未来をささえます



静岡市立静岡病院

SHIZUOKA CITY SHIZUOKA HOSPITAL

Since 1869

〒420-8630 静岡市葵区追手町10-93 TEL 054-253-3125

[www.shizuokahospital.jp](http://www.shizuokahospital.jp)